平成２８年 4 月21 日

平成２７年度くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク収支報告書

「戦後７０年　平和の継承事業」での熊本放送文化振興財団助成金に関わる収支について（報告）

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク
代　表　松　本　重　美

１　収　入

熊本放送文化振興財団助成金　……１００，０００円

２　支　出

○需用費／コピー／印刷　……2,８５９円
　写真用紙、スキャン

○需用費／　消耗品　……9,６２４円
　事務用消耗品、用紙、ラミネートフイルム

○需用費／資材／パネル　……２４,８４５円
　パネル資材、ハレパネ等

○通信費／郵便料　……4,５５０円

○使用料　……６１,４６０円
　県民交流会館パレアホール、旭町公民館、豊岡キリスト教会

○旅費交通費　……2,１００円

３　収　支

収入：１００，０００円－支出：１０５,４３８円＝△５，４３８円
※不足分５，４３８円は、くまもと戦跡ネットで負担しました。

連　絡　先
くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク
事務局長　　髙　谷　和　生
自宅／〒８６５－００６１　熊本県玉名市立願寺１２６－５
Eメール　takayanagi912@yahoo.co.jp
ブログ　sensekinet.cocolog-nifty.com

平成２８年4 月21 日

一般財団法人　熊本放送文化振興財団
理事長　　浅山　弘康　様

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク
代表　松本　重美

平成２７年度一般財団法人熊本放送文化振興財団助成事業に関わる活動報告書

平成２７年４月２４日に助成金交付のありました事業が完了しましたので、下記のとおりご報告いたします。

記

１　助成事業名　　戦後７０年　平和の継承事業

２　助成事業の内容等

（１）目　的

Ⅰ事業：写真展「戦後７０年　熊本の旧軍飛行場を活写する！～重松瑞男と米軍が見た菊池・隈庄・健軍飛行場～」を開催し、県民への平和啓発活動を行った。

Ⅱ事業：講演会「戦後７０年　米軍資料から熊本空襲を考える！」を開催し、県民への平和啓発活動を行った。

Ⅲ事業：啓発マンガ「人吉球磨は秘密基地」増補版発刊の予備調査を実施した。

（２）使　途

Ⅰ事業：写真展「戦後７０年　熊本の旧軍飛行場を活写する！～重松瑞男と米軍が見た菊池・隈庄・健軍飛行場～」を県内２箇所の会場で開催した。

Ⅱ事業：講演会「戦後７０年　米軍資料から熊本空襲を考える！」を熊本パレアで開催した。

Ⅲ事業：事業費不足で、啓発マンガ発刊に向けての予備調査を行い、関係者とともに錦町ホームページへの啓発マンガの掲載を行った。

（３）効　果

Ⅰ事業：写真展開催により、これまで未発表であった県内旧軍飛行場の様子を日本軍と米軍の視点から俯瞰することができた。また、ご遺族の証言から戦争の悲惨さ、平和の大切さを知る機会となった。

Ⅱ事業：講演会開催により、これまで知られていなかった８／１０空襲の実相が判明し、米軍資料と空襲証言の重層化が図れる。また、熊本空襲で初めてナパーム弾の使用が確認された。

Ⅲ事業：予備調査を進め、錦町・人吉飛行場顕彰の会との連携が図れた。

３　添付資料等

○平成２７年度一般財団法人熊本放送文化振興財団助成事業に関わる活動詳細報告書
○平成２７年度くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク収支決算書
○各領収書写し　　※公開不可
○参考資料　　掲載新聞記事・案内チラシ
　　講演会会場配布資料（くまもと戦争遺産ガイドマップ・熊本空襲講演冊子）

連　絡　先

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク　理事・事務局長
肥後考古学会 幹事　　髙　谷　和　生
自宅／〒８６５－００６１　熊本県玉名市立願寺１２６－５
ＴＥＬ＆ＦＡＸ　　０９６８　７４－５０３０
個人携帯　　０９０－１５１３－５５２８
Ｅメール　　takayanagi912@yahoo.co.jp
ブログ　　sensekinet.cocolog-nifty.com

平成２８年３月３１日

平成２７年度一般財団法人熊本放送文化振興財団助成事業に関わる活動詳細報告書

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク
代表　松本　重美

1　くまもと戦跡ネット「戦後７０年　平和の継承事業　Ⅰ」

（1）概　要　　写真展「戦後７０年　熊本の旧軍飛行場を活写する！
～重松瑞男と米軍が見た菊池・隈庄・健軍飛行場～」

戦後７０年となる平成２７年夏、太平洋戦争で戦死された故人のアルバム二冊、米国国立公文書館所蔵の空襲写真資料や進駐軍による接収写真資料等を基に、郷土熊本にあった菊池・隈庄・健軍飛行場の戦時や敗戦直後の様子を、本邦初となる「未公開写真４０枚」で写真映像文化としてリアルに描き出せた。

また、この写真公開にあわせ両飛行場に関わる、特攻隊員の絶筆、陸軍戦闘機“疾風”車輪や部品、健軍飛行場所属の陸軍四式重爆撃機“飛龍”墜落機部品などの戦時航空機資料１０点も展示した。

なお、玉名会場では７月２６日ご遺族・ご親戚の方の講和会を開催し、戦争の悲惨さや平和の大切さを知る機会となった。

また城南会場では、８月１３日に「１９４５年８月１０日の熊本空襲で初めて、ナパーム弾が使用された写真」の公開も行い、熊本大空襲の実相に迫った。

（2）日　時　　平成２７年７月２２日（水）～８月３０日（日）まで
前期（玉名会場）：７月２２日（水）～８月９日（日）
後期（熊本市城南会場）：８月１３日（木）～８月３０日（日）

（3）場　所
ア　玉名市立歴史博物館「こころピア」ロビー・エントランスホール　　玉名市岩崎１１７
イ　熊本市立城南図書館エントランスホール　　熊本市南区城南町舞原４５１－９

（4）展示内容
ア　重松瑞男少尉アルバム　　……菊池２６枚、隈庄１２枚
岡山県出身・第八十六期戦闘操縦・昭和１９年１１月１４日フィリピンネグロス島沖の空中戦にて戦死。また菊池飛行場では、鈴木泰治少尉アルバム（静岡県出身・陸軍幹部候補生第九期・第百十一振武隊。昭和２０年６月３日沖縄特攻で戦死。全２５枚）の再掲も含んだ。隈庄飛行場では、久我政基アルバムからの再掲も行った。
イ　工藤洋三氏提供米軍資料（米国国立公文書館蔵）菊池飛行場　４枚、熊本飛行場　３枚
ウ　福林徹氏提供米軍資料（米国国立公文書館蔵）菊池飛行場　４枚、健軍飛行場　５枚
エ　本邦初公開となる大津町からの「陸軍四式重爆撃機“飛龍”墜落機部品」、陸軍「疾風」主輪・尾輪、脚部品、海軍機「零戦」銘板、特攻隊員出撃前の絶筆写し、直筆短冊他

（5）共催・後援：玉名市立歴史博物館、熊本市立城南図書館、熊本市、ＲＫＫ熊本放送局、熊本日日新聞社、熊本市

2　くまもと戦跡ネット「戦後７０年　平和の継承事業　Ⅱ」

（1）概　要　　講演会「戦後７０年　米軍資料から熊本空襲を考える！」

大戦末期、米軍が行った熊本空襲の全容を米軍資料から読み解く。特に７月１日大空襲とあわせ、７０年前のもう一つの熊本大空襲「米陸軍・極東航空軍による８月１０日の熊本空襲」についても、最新の研究成果を市民向けに解りやすくお話しいただいた。

（2）日　時　　平成２７年８月９日（日）午後１３時～１５時

（3）場　所　　くまもと県民交流館パレア・パレアホール
〒860-8554　熊本市中央区手取本町８番９号　TEL：０９６－３５５－４３００

（4）テーマ「戦後７０年　米軍資料から熊本空襲を考える！」
空襲・戦災を記録する会全国連絡会議　事務局長　工藤　洋三氏

（５）主催団体、後援団体　等

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク、県内戦跡保存関係各団体、生活協同組合くまもと。後援は、熊本日日新聞社・ＲＫＫ熊本放送・熊本市、九州ろうきん

３　くまもと戦跡ネット「戦後７０年　平和の継承事業　Ⅲ」

（１）概　要　　啓発資料「戦後７０年　人吉球磨は秘密基地」増補改訂版の発刊準備

戦後７０年にむけて、本会と郷土史研究者の福田晃市さん、人吉海軍航空隊を顕彰する有志の会、人吉・球磨の戦争遺跡を伝えるネットワークとの協働作業で、調査等を進めている「人吉海軍航空隊基地跡」及び周辺戦跡について、県民向けに調査内容を盛り込んだ、啓発マンガの増補改訂版の基礎資料づくりを行った。

４　事業の成果

（１）写真展「戦後７０年　熊本の旧軍飛行場を活写する！　～重松瑞男と米軍が見た菊池・隈庄・健軍飛行場～」の開催により、両会場で通算の来館は、約３００人であった。これまで未公開であった旧軍飛行場の戦時状態を旧軍及び米軍撮影の写真資料を用いてよりリアルに体感し、戦争の悲惨さを知る戦時資料としては勿論の事、映像文化としても多くの方々に認識していいただくことができた。

（２）講演会「戦後７０年　米軍資料から熊本空襲を考える！」当日参加は、神奈川県・福岡市等の県外も含め２００人であった。７０年前のもう一つの熊本大空襲「米陸軍・極東航空軍による８月１０日熊本空襲」での、計画的な空襲の様子や最新兵器ナパーム弾での空襲を知る事ができた。また、本講演会に合わせて、県内各団体の活動事例発表、参加団体の活動紹介パネル展示、各団体持ち寄りの啓発パンフレット等の配布を行い、平和の大切さを訴えた。

（３）啓発資料「戦後７０年　人吉球磨は秘密基地」増補改訂版の発刊準備については、事業費不足で、刊行は行えなかった。ただし、啓発マンガ発刊に向けての予備調査（出水海軍航空隊・筑波海軍航空隊他３か所）を行い、執筆者の好意により錦町ホームページに掲載し、閲覧やダウンロードができるようにして、多くの閲覧が行われた。

（４）これらの平和の継承事業により、熊本県内で戦争の実相に迫り、恒久平和の思いを強めることができた。また、県内に残された旧軍飛行場資料や空襲資料を保存管理し、将来に伝える必要性も参観者からは寄せられた。

５　活動の様子

（１）「戦後７０年　平和の継承事業　Ⅰ」

写真展「戦後７０年　熊本の旧軍飛行場を活写する！
～重松瑞男と米軍が見た菊池・隈庄・健軍飛行場～」の様子

□右：飛龍の垂直尾翼、疾風主輪・脚部品、隈庄飛行場の様子パネル
□中：墜落機「飛龍」部品、健軍飛行場概要、零戦銘板の展示
□右：会場中央の展示の様子　重松瑞男さん家族の肖像、軍務写真
玉名市立歴史博物館「こころピア」ロビー・エントランスホール

□右：墜落機「飛龍」垂直尾翼の展示と解説の様子
□左：「旧軍飛行場を活写する展」の展示解説
玉名市立歴史博物館「こころピア」ロビー・エントランスホール

□右：７月２６日ご遺族・ご親戚の方の講和会での証言の様子
□左：講和会での写真アルバム等の解説説明
玉名市立歴史博物館「こころピア」レクチャールーム

□右：城南会場での展示様子
□中：中央での遺品展示と参観の様子
□左：８月１３日の熊本空襲でのナパーム弾使用の報道発表
熊本市立城南図書館ロビー

2015年
（平成27年）
8月14日
金曜日

熊本日日新聞

発行所
熊本日日新聞社
〒860−8506
熊本市中央区世安町172
☎代表(096)361−3111
© 熊本日日新聞社 2015年

熊本空襲でナパーム弾

市民団体 米軍撮影写真を入手

太平洋戦争末期の1945年8月10日、米軍が熊本市を空襲した際にナパーム弾を使ったことを示す写真が見つかった。市民団体のくまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワークが13日公開した。「熊本でのナパーム弾使用が初めて確認された」としている。

空襲・戦災を記録する会全国連絡会議の工藤洋三事務局長＝山口県＝が、米国立公文書館から入手した。

ナパーム弾はガソリンと増粘剤の混合油が入っており、広範囲を焼く能力がある。米空軍が7月29日～8月12日、九州上陸に備えて鹿児島県や宮崎県の空襲で使ったという。ベトナム戦争の爆撃でも使用している。

見つかった写真は白黒で米軍機が撮影。煙突のような設備のある建物が映り、近くで空襲による煙が上がっている。写真下部には8月10日午前10時の撮影日時や「KUMAMOTO」の文字、機体などを示す数字が記載されている。

1945年8月10日、米軍機が熊本市をナパーム弾で空襲した際に撮影したとみられる写真。空襲による煙が上がっている（工藤洋三さん・高谷和生さん提供）

同ネットワークの高谷和生事務局長(60)によると、機体は沖縄を拠点にした米空軍部隊の所属。この日、ナパーム弾を搭載した同部隊の「A−26軽爆撃機」が熊本を空襲したという記録もあり、ナパーム弾の空襲写真という。

「7月の熊本大空襲で焼き尽くせなかった地区を焼くため、8月10日に再び空襲したのではないか」と高谷さん。ただ、撮影場所は熊本市のどこか不明で、同会は情報提供を求めている。

同ネットは30日まで熊本市立城南図書館で県内の旧陸軍飛行場の写真とともにナパーム弾空襲の写真を展示している。情報は高谷さん☎0968(74)5030。

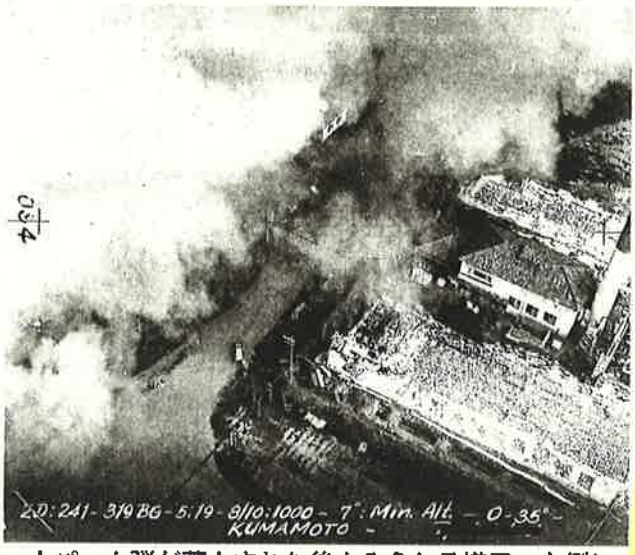
（中村勝洋）

熊本空襲にナパーム弾

戦後70年 くまもと

米公文書館の写真を展示

終戦間近の1945年8月10日にあった熊本市内への空襲で、ナパーム弾が使用されていたことを示す写真が、米公文書館で見つかった。ナパーム弾は同年7月29日ごろから南九州一帯で使われていたが、熊本での使用はわかっていなかった。県内の市民団体が13日から、熊本市南区の市立城南図書館で展示している。



ナパーム弾が落とされた後とみられる様子。右側に工場のような煙突と倒壊した建物、中央には荷台を引く牛が見える＝工藤洋三さん、高谷和生さん提供

写真は、占領された沖縄から飛び立った米陸軍の軽爆撃機「A26」から撮影されたものとされる。米軍資料を調べている元・徳山高専教授の工藤洋三さんが発見し、「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」に提供した。

モノクロで正方形の写真の下部には「8／10 KUMAMOTO」の記載があることから、8月10日、熊本市街地にあった空襲の写真と考えられるという。米軍が撮影したこの日の写真の発見は、これで2例目。

もくもくと広がる煙幕はナパーム弾が炸裂したあとで、煙突が写っており、工場のようにも見える。隣の建物はすでに倒壊していて人の姿はないが、荷車を引いた牛がたたずんでいる様子もうかがえる。

会場で写真について説明する高谷さん＝熊本市南区

市民団体 場所を調査

同ネットワークによると、A26軽爆撃機はガソリンなど数百トンを詰め込んだナパーム弾を搭載し、地上すれすれの高度30メートル付近から投下。あわせて見つかった米軍の記録では、計479発が熊本に落とされたとの記載があるという。

ナパーム弾は高温の炎で地上を焼き尽くし、逃れた人さえも酸欠するほどの威力がある。ベトナム戦争で多用されたが、現在では文民や人口周密地域などに向けた使用は条約で禁止されている。同ネットワーク事務局長の高谷和生さん(60)は「終戦の5日前であっても、街は効率的に徹底的に破壊された。これが戦争の実相だと思う」と話した。

展示は30日まで。写真の詳しい場所は特定できておらず、高谷さん（0968・74・5030）は情報を求めている。（篠智広太）

熊本空襲

「大火を兵器に」

米軍の資料基に　元徳山高専教授が講演

講演会「戦後70年 米軍資料から熊本空襲を考える」が9日、熊本市中央区のくまもと県民交流館パレアであった。1945年7月1日と8月10日の熊本空襲を米国の公文書などで読み解くのが狙い。講師は元徳山高専(山口県周南市)教授、工藤洋三さん(65)で市民ら約200人を前に「米軍は焼夷弾で制御不能の大火を作り、破壊力が高い兵器として活用した」と話した。

戦争遺産フォーラムくまもと・生活協同組合くまもとの共催。工藤さんは各地の空襲被害を調べており米国立公文書館などで集めた資料を基に解説した。1943年10月の米軍リポートについて「日本はドイツよりも過密で大火になりやすいと結論づけた」と指摘。日本の木造家屋を再現して焼夷弾を開発しており「人口分布などから空襲対象を設定し綿密」とした。また熊本市の呉服町電停付近と同市の明午橋通り交差点を中心に爆弾を投下しており「じゅうたん爆撃と違う」と説明した。

8月10日の空襲については検事正が司法大臣に宛てた電報を披露。広島、長崎原爆の被害状況に「(熊本でも)人心動揺の兆しあり」としており、工藤さんは「実態把握のために送らせた電報から戦意が低下する姿も見える」と主張。その上で空襲体験者が少なくなる現状にも触れ「若い人の知識欲を刺激したい。米国の資料やネット上で公開されている情報を活用すれば新しい空襲記録を作っていける」と提言した。

【柿崎誠】

「若い人の知識欲を刺激したい」などと語る工藤さん

～戦後７０年～

講演会

米軍資料から熊本空襲を考える！

講師：工藤 洋三 氏
空襲・戦災を記録する会全国連絡会議 事務局長

日時 平成２７年
８月９日（日）
１３：００～１５：５０

場所 くまもと県民交流館パレア
パレアホール（定員 280 名）
※事前申し込み不要、入場無料
（別途資料代 200 円）

米軍機のガンカメラが撮影した 1945 年 8 月 10 日
川尻空襲の様子　（南九州市 國﨑 潤 氏提供）

■「戦争遺産フォーラムくまもと」とは？
熊本県内で戦争遺産関係の保存・啓発活動などを行っている団体の連携体。各団体それぞれで活動しながら、意見交換や相互協力を行っています。

主催：戦争遺産フォーラムくまもと・生活協同組合くまもと
協賛：熊本県生活協同組合連合会
後援：熊本日日新聞社・熊本放送・熊本市

語る伝える
くまもと戦後70年

写真の父に思いはせ

大空に「キクチ」の文字 編隊の要を飛んだ

生後4カ月で死別 芦北町の宇ノ木さん

アルバム提供の展示会場で語る

「平和のありがたさを…」

仏壇に納められていたアルバムの写真が実の父だと知ったのは、小学6年生のときだった。

宇ノ木瑞代さん(71)＝芦北町＝は、生後4カ月だった1944年11月に旧陸軍少尉の父重松瑞男さんを亡くした。幸い、養父となった伯父の家族は優しく、寂しい思いはしていなかった。「父が戦死したと教わっても、それほど悲しさや感慨はなかった」

重松さんは岡山県津山市で8人きょうだいの四男として生まれ、志願して旧陸軍に入隊。太平洋戦争開戦後は中国大陸に出征し、41～42年に隈庄(くまのしょう)飛行場（現熊本市南区城南町舞原）で飛行機の操縦を学んだ。そのころ結婚した。

重松さんは菊池飛行場（現菊池市泗水町）で飛行教官を務め、その後、フィリピンのネグロス島で戦死した。享年30。「飛行場が爆撃で壊されて着陸できず、敵機に体当たりして海に落ちた」と、生還した同僚が家族に伝えた。

玉名市立歴史博物館で父の故重松瑞男さんについて語る宇ノ木瑞代さん（右）と親類の間垣富之さん

2013年夏、菊池飛行場の飛行機が「キクチ」の文字の形に飛ぶ写真が静岡県で見つかり、菊池市で初めて公開された。1943年4月の記念飛行らしいことなどが分かった。

重松さんのアルバムにも同じ写真があった。

「此の時見に行きました　瑞男君は『キクチ』チの中心」。編隊の要を飛んだ重松さんへの誇らしさが、写真脇につづられた家族の文ににじむ。

宇ノ木さんは昨年11月、父の生い立ちを探ろうと親戚の間垣富之さん(60)とともに岡山県を訪れた。実家は空き家になっていたが、いとこから「瑞男おじさんは礼儀に厳しい人だった」と聞くことができた。

この夏、菊池飛行場などを紹介する写真展「熊本の旧軍飛行場を活写する」にアルバムを提供し、会場の玉名市立歴史博物館で来場者に思いを語った。

「『瑞』の字を名前につけてくれた父は、戦いの中に家庭の安らぎを残したかったのでは。戦後70年に眠っていた写真が日の目を見て、本当にありがたい。写真を通して、平和のありがたさを再認識してもらえればうれしい」

（和田剛）

熊本の旧軍飛行場 玉名市で写真展

戦争遺産の保存・啓発に取り組む「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」(松本重美代表、高谷和生事務局長)は、県内の旧陸軍飛行場を紹介する写真展「熊本の旧軍飛行場を活写する」を、玉名市岩崎の市立歴史博物館で開いている。30歳で戦死した重松瑞男さんのアルバムからの抜粋や、米国公文書館資料など、今回初公開となる写真約60点を含む百数十点を展示している。初公開写真を中心に、その一部を紙面で紹介する。

60点は初公開

重松さんのアルバムからは、写真愛好家の久我政巷さん=熊本市南区城南町=が飛行教官だった当時に隈庄(あらしょう)飛行場(現熊本市南区)を撮影した写真など。米国公文書館蔵では、関係者が今回見つけた健軍飛行場(同東区)を米軍が攻撃する写真などが展示されている。

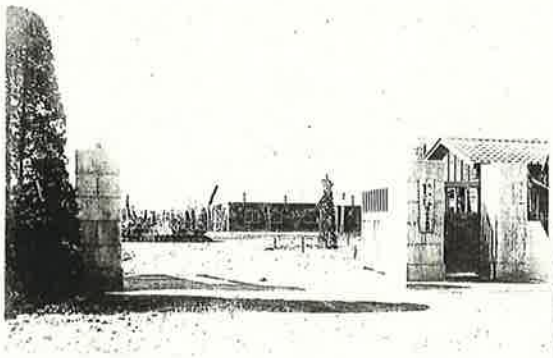
同博物館での展示は9日まで。13~30日は、熊本市南区城南町の市立城南図書館で開催。入場無料。高谷さん=0968(74)5030。

健軍飛行場南側区画を攻撃する米軍機からの写真。中央左の集落が、現在の熊本市東区新外付近
=1945年5月13日(米国公文書館蔵、福林徹氏・高谷和生氏提供)

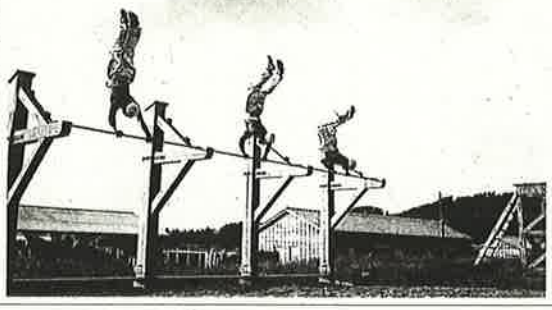
空に機影で浮かぶ「キクチ」の文字の「チ」の中心(黒い目印あり)が、複葉練習機の重松瑞男さん
=1943年4月の基地開放日の撮影か
(宇ノ木瑞代氏・高谷和生氏提供)

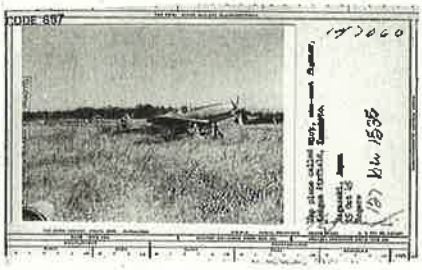
九七式戦闘機と重松瑞男さん
=1943~44年ごろ、菊池飛行場
(宇ノ木瑞代氏・高谷和生氏提供)

重松瑞男さんが飛行機操縦を習った大刀洗飛行学校隈庄分教所で鉄棒をする生徒たち
=1941~42年ごろ(宇ノ木瑞代氏・高谷和生氏提供)



大刀洗飛行学校隈庄分教所(現熊本市南区城南町舞原)の正門
=1941~42年ごろ(宇ノ木瑞代氏・高谷和生氏提供)





米海兵隊が撮影した健軍飛行場に遺棄された旧日本陸軍三式戦闘機「飛燕(ひえん)」
=1945年10月15日(米国公文書館蔵、工藤洋三氏・高谷和生氏提供)

日記、写真、手紙…80点並ぶ

玉名市の市立歴史博物館こころピアで25日、戦時中の手紙や日誌などを集めた企画展「戦後70年　なぜ戦いを繰り返すのか」が始まった。10月18日まで。

同館が戦争体験を伝え、語り継ごうと企画した。市民らから寄せられた写真や日記、雑誌などを展示。授業で射撃訓練をする旧制玉名中の生徒の写真や、戦地から妻に宛てた手紙など80点が並ぶ。

「私は毎日、兵隊さんがお元気で働いて下さるように、神様やほとけ様にお祈りして居ります」などと当時の小学生が軍人に宛てた慰問手紙もあり、「日常の中に、当然のように戦争が入り込んでいたことを知ってほしい」と同館。

初日は戦争体験者による座談会もあった。和水町の高木寛子さん(89)、玉名市の大門ミヤコさん(86)、大仁田博さん(84)が来場者約20人に、学生時代を中心に夜中の行軍訓練の様子や、修学旅行に行けず積立金で国債を購入した経験、戦時下の暮らしぶりなどを紹介した。

旧高瀬高女時代に学徒動員され、荒尾製造所で火薬製造に当たった大門さんは「地獄のような生活。昼夜問わず空襲があり怖かった」と話した。最後に3人は「今後、自衛隊が戦争に向かうことにならないか不安。戦争は二度と繰り返してはならない」と力を込めて語った。

(馬場正広)

会場に展示している戦時中に書かれた日記＝玉名市

くまもと 戦後70年

戦争 繰り返させぬ

玉名市で企画展や講話会

来月15日の70回目の終戦の日を前に、玉名市の市立博物館こころピアが戦争の悲惨さを伝える企画展をスタートさせ、民間団体が同館で戦争遺族による講話会を開いた。

「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」は26日、玉名市の市立歴史博物館こころピアで、1944年にフィリピンで戦死した重松瑞男少尉(岡山県出身)の遺族らによる講話会を開いた。

同ネットワークが同館で開いている、県内の旧日本軍の飛行場などを紹介する写真展に合わせて企画。同展では、菊池飛行場で教官を務めた少尉の写真を初公開している。

この日、少尉の長女宇ノ木瑞代さん(71)＝芦北町＝と親戚の間垣富之さん(60)＝八代市＝が講演した。

生後間もなかった宇ノ木さんは、ネグロス島沖の空中戦で敵機と激突して戦死したという少尉の同僚の証言などを紹介。「父の記憶は無いが、写真を通し優しさや厳しさを感じる」と話した。

少尉の写真を保管していた間垣さんは、岡山の重松家を訪れるなど少尉について独自に調べた経験から、「戦争をしてはならないとの思いが強くなった。写真が平和や戦争について考えるきっかけになれば」と語った。

同館での展示会は8月9日まで。同13日から、熊本市の市立城南図書館で展示する。

(馬場正広)

1944年にフィリピンで戦死した重松瑞男少尉＝玉名市

フィリピンで戦死 重松瑞男少尉

写真公開 遺族ら思い語る

重松瑞男少尉への思いを語った宇ノ木瑞代さん(右)と間垣富之さん＝玉名市

米軍の空撮写真など未公開資料の展示準備を進める高谷和生事務局長＝玉名市

戦争の実相 写真で伝える

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネット

菊池 健軍 隈庄 旧軍飛行場

玉名市立歴史博物館 きょうから公開

県内の戦争遺跡を調査している「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」は、22日から玉名市立歴史博物館で、旧日本軍の飛行場3カ所の戦時中と敗戦後の様子を収めた貴重な写真を公開する。戦争の実相と平和の大切さを伝える企画で、8月9日まで。

「戦後70年　熊本の旧軍飛行場を活写する！」と題し、菊池（菊池市）、健軍（熊本市東区）、隈庄（同市南区）の各飛行場の写真を紹介。米軍保管資料など未公開59点を含む80点余りを展示する。

未公開分には、太平洋戦争末期に米軍が健軍飛行場を爆撃した際に空撮した写真も。隈庄飛行場で学び、菊池飛行場で教官を務め、1944年にフィリピンで戦死した重松瑞男少尉（岡山県出身）所蔵の写真も初公開する。芦北町に住む遺族が提供した。

45年に大津町に墜落した重爆撃機「飛龍」の部品や、菊池市出身の特攻隊員、原田栄大尉の遺品も公開する。26日午後1時半からは同ネットワークの高谷和生事務局長が展示品を解説し、重松少尉の遺族2人が講話する。高谷さんは「写真や遺族の話から、戦争の現実を感じ取ってほしい」と来場を呼び掛ける。

写真は8月13～30日に熊本市南区城南町の市立城南図書館でも展示する。高谷さん☎0968（74）5030。（楠本佳奈子）

展示会

戦後７０年

熊本の旧軍飛行場を活写する！

～重松瑞男と米軍が見た菊池・健軍・隈庄飛行場～

菊池飛行場での練習機による
編隊飛行「キクチ」（昭和 18 年頃）

故 重松瑞男少尉

日時

平成２７年
７月２２日（水）～８月３０日（日）まで

前期（玉名会場）：７月２２日（水）～８月９日（日）
後期（熊本市立城南会場）：８月１３日（木）～８月３０日（日）

場所

玉名会場
玉名市立歴史博物館こころピア
エントランスホール
玉名市岩崎 117　TEL:0968-74-3989

城南会場
熊本市立城南図書館　エントランスロビー
熊本市南区城南町舞原 451-9
TEL:0964-27-5945

主催：くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク
共催：玉名市立歴史博物館こころピア　熊本市立城南図書館
後援（予定）：熊本市　ＲＫＫ熊本放送局　熊本日日新聞社

くまもと
戦争遺跡・文化遺産
ネットワーク
Kumamoto War-site & cultural heritage Network

地下壕 戦争遺跡へ整備

千葉・館山市 平和学習、観光の拠点に

錦町で昨年、戦時中に造られた人吉海軍航空隊の地下壕や作戦室、無線室などが見つかった。町や地元の住民グループは、戦争遺跡として整備する取り組みを始めた。先行する千葉県館山市では2004年から、館山海軍航空隊・赤山地下壕跡が平和学習や観光資源として活用され、戦後70年の今年も多くの人が訪れている。現地を訪ねた。（河北英之）

今月17日。地元で戦跡の保存活動に取り組むNPO法人「安房文化遺産フォーラム」の金久修さん(70)の案内で地下壕へ。

土のにおいが漂う中を懐中電灯を手に一歩一歩進む。穴はまるで迷路のように四方に延びており、総延長は1・6キロ。頭をかすめるほどの高さの通路の所々に、広さ60畳ほどで高さも数メートルある空間が設けられている。

■首都を守る要塞

「ここには通信部隊が詰め、暗号解読などをしていたそうです」。壁にはツルハシで削った痕跡が鮮明に残る。地盤がもろいため発破や重機が使えず、ほとんど手掘りで造られたという。

1時間ほどの間に、地元の親子やツアー客が次々に訪れる。「地下壕を造らざるを得なかった戦争というものを、肌で感じてもらえれば」と金久さん。

房総半島の南端、東京湾の入り口に位置する館山市は戦時中、街全体が「首都・東京を守るための「要塞」」とされた。多くの砲台が造られ、1930年に館山海軍航空隊が置かれた。戦争末期には本土決戦に備え、約7万人の兵士が集結したともいわれる。赤山地下壕は、空襲を避けるための施設とされるが、資料が乏しく、掘られた時期などは判然としない。戦争体験者の証言で、戦闘指揮所や格納庫の存在が明らかになった。

■課題は「安全性」

地下壕は戦後、そのままの状態で放置されていた。戦跡として整備されるきっかけは戦後50年の1995年。地元の高校教師だった愛沢伸雄さん(63)＝同NPO代表＝らが「歴史教育に生かせないか」と調査や講演活動を始めた。保存を求める市民の声が次第に高まり、館山市も保存・活用に乗り出した。

「負の遺産」のイメージもある戦跡の保存や整備には消極的な自治体も少なくないが、同市は歴史的価値があると判断。97年、子どもたちの平和学習や観光の拠点として生かす方針を決めた。

最大の課題は安全性だった。地下壕は崩落部分もあり、市は本格的な地質調査を実施。04年4月、安全が確認された一部のみ（長さ約250メートル）の公開を始め、翌年には市史跡に指定した。現在も月1回の点検と、年1回の詳細な検査を欠かさないという。入場料は一般200円、小中高生100円。

■行政と民間連携

今年3月末までの11年間の入場者は17万5千人。昨年度は過去最多の2万4千人が訪れた。同市教委は「戦後70年を迎え、戦争への関心が高まっている」と分析する。内訳は県外からが63%で、東京都や神奈川県など首都圏が多い。団体客の割合は36%。小中学・高校の平和学習に利用されるほか観光ツアーの行程に組み込まれるなど観光資源としても定着してきたという。

同市内では、空襲から戦闘機を守る掩体壕や砲台跡などの戦跡が47カ所確認されているが、赤山地下壕以外はほとんどが民有地。市が関わることが難しいため、NPOや住民団体が地権者の了解を得て管理やガイドツアー（有料）をしている。

愛沢さんらのNPOにも約20人の「語り部」がいる。同市教委は「行政が及ばない部分を補ってもらっている。民間との連携が大切」と強調する。

戦争遺跡の意義について、愛沢さんは語る。「戦争の悲惨さや当時の人々の暮らしをまざまざと教えてくれる。私たちは貴重な戦跡を残し、伝え続けていかなければならない」

年度内に調査測量などに着手したい考えだが、公開までには、安全性や地権者の了解、費用負担など課題は多い。5年計画で進める予定といい、森本完一町長は「安全性の確保が大前提。戦争の悲惨さを伝える戦跡として、少しずつ整備していければ」と話す。

一方、住民有志らは同地下壕を中心に、人吉市や湯前町などに残る防空壕などの調査・研究に取り組む。金山充さん(64)＝湯前町＝は「戦跡の保存・活用が、人吉球磨全体の活性化につながればいい」と期待する。

ツアー客に地下壕を案内するガイドの金久修さん（左から2人目）＝千葉県館山市

人吉海軍航空隊 錦町も活用チーム

人吉海軍航空隊の地下壕。住民団体の調査で約20の施設が見つかった＝錦町

人吉海軍航空隊の地下壕跡からは、作戦室や無線室など約20の施設が見つかった。70年間、地下に眠っていた「戦跡」をまちづくりに生かす動きが始まっている。

同隊は1944年2月に発足。飛行予科練習生が飛行訓練などを受けていたが、1年5カ月で解隊された。旧軍の地下無線室の確認は九州でも数例しかないが、地下壕の存在は地元でもほとんど知られていなかった。

錦町は今年2月、「基地跡活用研究プロジェクトチーム」（6人）を設置した。まずは住民に知ってもらおうと、町広報紙で特集。地区ごとに開く町政座談会でも報告し、情報提供を求めている。

特報 Report